# 第3章 基礎方程式系の基本的な適用

2 章で議論した地衡風に加えて、速度、圧力、温度場の間に別の近似的な関係式が存在し、これらは圧力座標系で用いるのが便利. ゆえに、本章の基本的な適用を導入する前に、圧力座標系における力学方程式を導出する.

## 3.1 圧力座標系の基礎方程式系

### 3.1.1 水平運動方程式

近似的な水平運動方程式 (2.24), (2.25) は\*1ベクトル形式で

$$\frac{D\mathbf{V}}{Dt} + f\mathbf{k} \times \mathbf{V} = -\frac{1}{\rho} \nabla p \tag{3.1}$$

と表記できる $^{*2}$ . ここで、V=iu+jv は水平速度ベクトル. これを圧力座標系にするため、(1.20)、(1.21) を $^{*3}$ 用いると、

$$\frac{D\mathbf{V}}{Dt} + f\mathbf{k} \times \mathbf{V} = -\nabla_p \Phi \tag{3.2}$$

となる $^{*4}$ . ここで,  $\nabla_p$  は等圧面で適用される水平勾配演算子.

\*1 (再掲)  $\frac{Du}{Dt} = fv - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial x} = f(v - v_g), \qquad (2.24)$ 

$$\frac{Dv}{Dt} = -fu - \frac{1}{\rho} \frac{\partial p}{\partial y} = -f(u - u_g)$$
(2.25)

 $^{*2}$  (原文誤植)右辺の p が添字になっていたが、実際には添字ではない.

\*3 (再掲)

$$gdz = d\Phi = -(RT/p)dp = -RTd\ln p \tag{1.20}$$

$$\Phi(z_2) - \Phi(z_1) = g_0(Z_2 - Z_1) = R \int_{p_0}^{p_1} Td\ln p$$
(1.21)

\*41 章で導出された鉛直座標系の変換式:

$$\nabla_s p = \nabla_z p + \left(\frac{\partial p}{\partial z}\right) \nabla_s z$$

p は独立な鉛直座標なので、全微分は

$$\frac{D}{Dt} \equiv \frac{\partial}{\partial t} + \frac{Dx}{Dt} \frac{\partial}{\partial x} + \frac{Dy}{Dt} \frac{\partial}{\partial y} + \frac{Dp}{Dt} \frac{\partial}{\partial p} 
= \frac{\partial}{\partial t} + u \frac{\partial}{\partial x} + v \frac{\partial}{\partial y} + \omega \frac{\partial}{\partial p}.$$
(3.3)

ここで,  $\omega\equiv Dp/Dt$  (通常「オメガ」鉛直運動と呼ばれる) は, 運動にしたがう圧力変化. これは, 高度座標系において  $w\equiv Dz/Dt$  が担っていたのと同じ役割を圧力座標系において担う.

(3.2) から圧力座標系での地衡風関係式は、

$$f \mathbf{V}_q = \mathbf{k} \times \nabla_p \Phi. \tag{3.4}$$

圧力座標系の 1 つの長所は、(2.23) と $^{*5}(3.4)$  を比べるとわかるように、密度が陽に現れない、与えられたジオポテンシャルの勾配は、任意の高度で同じ地衡風を意味する。一方、与えられた水平圧力勾配は、密度に依存して地衡風が異なっているということを意味する。さらに、f を一定とすると、等圧面での地衡風の水平発散は

$$\nabla_p \cdot V_q = 0$$

となる\*6.

を用いると、圧力座標系ではs=pであるため、上式は

$$0 = \boldsymbol{\nabla}_z p + \left(\frac{\partial p}{\partial z}\right) \boldsymbol{\nabla}_p z$$

となる. これに静力学関係式と (1.20) 式を等圧面で展開した式:

$$g\nabla_p z = \nabla_p \Phi$$

を用いると、

$$\nabla_z p = \rho g \nabla_p z = \rho \nabla_p \Phi$$

となるので、求める式が得られる.

\*5 (再掲)

$$\boldsymbol{V}_g \equiv \boldsymbol{k} \times \frac{1}{\rho f} \boldsymbol{\nabla} p \tag{2.23}$$

\*6(3.4) 式の両辺について等圧面上で水平発散をとると、f が一定であるから、

$$\mathbf{\nabla}_{p}\cdot\mathbf{\textit{V}}_{g}=rac{1}{f}\mathbf{\nabla}_{p}\cdot(\mathbf{\textit{k}} imes\mathbf{\nabla}\varPhi)$$

となる. ここで,ベクトル恒等式より,

$$\nabla_p \cdot (\mathbf{k} \times \nabla \Phi) = 0$$

であるので,

$$\nabla_p \cdot V_q = 0$$

が得られる.

#### 3.1.2 連続の式

高度座標系から圧力座標系に、連続の式(2.31)を $^{*7}$ 変形する。 ラグランジュ的領域  $\delta V=\delta x\delta y\delta z$  を考え、流体要素を  $\delta V=-\delta x\delta y\delta p/(\rho g)$  と表すために、静力学の式  $\delta p=-\rho g\delta z$ (ここで  $\delta p<0$  であることに注意)を適用すると、この流体要素の質量は、 $\delta M=\rho \delta V=-\delta x\delta y\delta p/q$  となるので、

$$\frac{1}{\delta M}\frac{D}{Dt}(\delta M) = \frac{g}{\delta x \delta y \delta p}\frac{D}{Dt}\left(\frac{\delta x \delta y \delta p}{g}\right) = 0$$

となる.

微分し,連鎖律を用い,微分演算子の順序を変えると\*8,

$$\frac{1}{\delta x}\delta\left(\frac{Dx}{Dt}\right) + \frac{1}{\delta y}\delta\left(\frac{Dy}{Dt}\right) + \frac{1}{\delta p}\delta\left(\frac{Dp}{Dt}\right) = 0$$

あるいは,

$$\frac{\delta u}{\delta x} + \frac{\delta v}{\delta y} + \frac{\delta \omega}{\delta p} = 0$$

となる.

 $\delta x,\; \delta y,\; \delta p o 0$  の極限をとり,  $\delta x,\; \delta y$  を等圧面で評価すると, 圧力座標における連続の式は

$$\left(\frac{\partial u}{\partial x} + \frac{\partial v}{\partial y}\right)_p + \frac{\partial \omega}{\partial p} = 0 \tag{3.5}$$

となる.

連続の式のこの形式は、密度場についての情報がなく、時間微分を含んでいない ⇒ 圧力座標系の大きな長所の1つである.

#### 3.1.3 熱エネルギー方程式

熱力学第一法則 (2.42) は $^{*9}Dp/Dt = \omega$  とし, (3.3) を用いて, DT/Dt を展開することで、圧力座標系の式にできる。 すなわち、

$$c_{p}\left(\frac{\partial T}{\partial t} + u\frac{\partial T}{\partial x} + v\frac{\partial T}{\partial y} + \omega\frac{\partial T}{\partial p}\right) - \alpha\omega = J$$

$$\frac{1}{\rho}\frac{D\rho}{Dt} + \nabla \cdot U = 0 \tag{2.31}$$

 $^{*8}$  (原文脚注) ここから g は定数とする.

\*9 (再掲)

$$c_p \frac{DT}{Dt} - \alpha \frac{Dp}{Dt} = J \tag{2.42}$$

となる. これは.

$$c_p \left( \frac{\partial T}{\partial t} + u \frac{\partial T}{\partial x} + v \frac{\partial T}{\partial y} \right) - S_p \omega = \frac{J}{c_p}$$
(3.6)

と書き直される. ここで、状態方程式とポアソンの式 (2.44) を\*10用いると、

$$S_p \equiv \frac{RT}{c_p p} - \frac{\partial T}{\partial p} = -\frac{T}{\theta} \frac{\partial \theta}{\partial p}$$
 (3.7)

となる $^{*11}$ . これは、圧力系に対する静的安定パラメータである. (2.49) と $^{*12}$ 静力学関係式を用いると、(3.7) は

$$S_p = (\Gamma_d - \Gamma)/\rho g$$

と書き直される.

したがって、減率が乾燥断熱減率より小さいとすると、 $S_p$  は正となる. しかし、密度が近似的に高度とともに指数関数的に減少するので、 $S_p$  は高度とともに急速に増加する. 安定性の指数  $S_p$  のこの強い高度依存性は、圧力座標系の数少ない短所である.

\*10 (再掲) 
$$\theta = T(p_s/p)^{R/c_p} \tag{2.44}$$

\*11(2.44) を p で微分すると,

$$\frac{\partial \theta}{\partial p} = \pi \frac{\partial T}{\partial p} + T \frac{\partial \pi}{\partial p}, \quad \pi \equiv \left(\frac{p_s}{p}\right)^{R/c_p}$$

となる。ここで、 $\frac{\partial \pi}{\partial p} = -\frac{R\pi}{c_p p}$  であるので、

$$\frac{\partial \theta}{\partial p} = \pi \frac{\partial T}{\partial p} - \frac{RT\pi}{c_p p}$$

となる. これを整理すると、

$$\frac{T}{\theta} \frac{\partial \theta}{\partial p} = \frac{\partial T}{\partial p} - \frac{RT}{c_p p}$$

が得られる.

\*12 (再掲)

$$\frac{T}{\theta} \frac{\partial \theta}{\partial z} = \Gamma_d - \Gamma \tag{2.49}$$